

図7 音楽と言語の進化 (S. ミズン、熊谷淳子訳『歌うネアンデルタール』早川書房、2006年より)

音楽は言葉以前に人間が発明した独特なコミュニケーションで、直立二足歩行をするようになって発声様式が変わり、踊ることのできる身体性を獲得したことが音楽によって他者と同調することを可能にしたという説がある (ミズン、2006年、図7)。音楽は他者との境界をなくし、人々を一体化させて連帯感を増す効果がある。コミュニケーションが社会の境界を決めるとすれば、まさに音楽は人間が作りだしたニッチであり、それが継承されていくことによって、新たな社会が生まれたことを意味している。音楽は育児とも密接な関係がある。危険な捕食者のいる環境で、育児を共同で行う際に、子守唄として子どもと母親以外のおとなとの親密度を高めることに使われたというのだ。音楽によって人間は、多産で成長の遅い子どもを育てる社

会を作ることができたのかもしれない。音楽によって変化した社会のニッチは、その後話し言葉や書き言葉によって新しく作りかえられた。そして今また、急激な変化の時代を迎えている。それは携帯電話やインターネットによるコミュニケーション革命である。人間は対面し、相手の存在を感じ取れる社会の肌触りの中で道徳を育ててきた。それが感じられないこの新しいコミュニケーション世界のなかで、道徳ははたして人間社会の規矩として持ちこたえられるだろうか。こころの準備ができないうまま巨大なコミュニケーションのニッチを構築してしまった今、私たちはこころと社会の在り方を進化の視点から再び見つめ直す必要があると私は思う。

参考文献

清水幾太郎 (1978) 『オーギュスト・コント——社会学とは何か』、岩波新書。
 伊谷純一郎 (1986) 「人間社会の進化——人間平等起原論」、伊谷純一郎・田中二郎編『自然社会の人類学——アフリカに生きる』、アカデミア出版会、pp.349-389。
 白鳥義彦 (2003) 『『動物社会』と進化論——アルフレッド・エスピナスをめぐって』、阪上孝編『変異するダーウィニズム——進化論と社会』、京都大学学術出版会、pp.237-264。
 山極寿一 (2007) 『暴力はどこからきたか——人間性の起源を探る』、NHKブックス。
 D. ハート・R. サスマン (2007) 『ヒトは食べられて進化した』、伊藤伸子訳、化学同人。
 J. オドリン=スミール・K. ラランド・M. フェルドマン (2007) 『ニッチ構築：忘れられた進化過程』、佐倉統・山下篤子・徳永幸彦訳、共立出版。
 S. ミズン (2006) 『歌うネアンデルタール——音楽と言語から見るヒトの進化』、熊谷淳子訳、早川書房。
 Boesch C (1992) New elements of a theory of mind in wild chimpanzees. *Brain and Behavioral Sciences* 15: 149-150.
 Preston SD, de Waal FBM (2002) Empathy: its ultimate and proximate bases. *Brain and Behavioral Science* 25: 1-72.
 Silk JB (2007) Empathy, sympathy, and prosocial preferences in primates. In Dunbar RIM, Barrett L (eds), *Oxford handbook of evolutionary psychology*, Oxford University Press, New York, pp 115-126.
 Sterck EHM, Watts DP, van Schaik CP (1997) The evolution of female social relationship in nonhuman primates. *Behavioral Ecology and Sociobiology* 41: 291-309.
 Van Schaik CP (1989) The ecology of social relationships among female primates. In: Standen V, Foley RA (eds) *Comparative Socioecology: The Behavioural Ecology of Humans and Other Mammals*, Blackwell Scientific Publications, Oxford, pp 195-218.
 Wrangham RW (1980) An ecological model of female-bonded primate groups. *Behaviour* 75: 262-300.

論考

自分のこころの中を覗いてみると……

山鳥 重 Atsushi Yamadori
 (神戸学院大学人文学部教授)



脳の働きとこころの働き

こころとはいったい何なのだろう？ 現在、日本を含め世界中で脳の研究が猛烈な勢いで展開されているが、脳がわかればこころも全部わかるのだろうか？ どうもそうとも言えないのである。

早い話、人間の価値観とか信念はこころが作り出すとは言えても、脳が作り出すとはなかなか言えるものではない。脳という神経細胞の集団、その集団のつながりである神経ネットワークが作り出すのは、細胞膜内外の電位差の変化、あるいは細胞間の神経伝達物質の移動であり、それ以上でもそれ以下でもない。このような物理現象にどういう魔法がかけられるか、正しいとか正しくないとかという心理的価値判断が出てくるのか、こころのつながりはなかなかわからない。

価値観とか信念というものは、社会が社会の成員の共通の原理として生み出してきたものである。これも脳が作り出すのなら、すべての人間に手指の器用な動きを制御する能力が備わり、すべての人間に考える能力が備わっているように、すべての人間に共通の価値観と共通の信念が備わっていてもよいはずだが、そんなことにはなっていない。脳はこころを生み出すための共通の仕掛けをわれわれに与えてはくれるが、こころの働きは個人によって大きく変わる。脳の働きとこころの働きには大きなギャップが存在するのである。

だからこころをわかりたいと思うならば、性急に心と脳をつなげずに、つまり、こころの働きのすべてを脳の働きに持っていかず、こころは

こころでこころ独自の働きがあることを知り、こころ独自の仕組みを考えていかなければならない。

といて、こころが脳を離れて出現することはない。脳が働いてくれないかぎり、こころは出現しない。こころが思案のしどころである。

なぜこういう面倒な話になるのか？

こころは脳の神経活動が生成する現象なのだが、実は、脳の神経活動とこころの関係は、われわれの思考にもっとも馴染んでいる原因と結果という関係では結ばれていないようなのである。

因果関係というのは、特定の原因が一定の時間後に特定の結果を引き起こすことを言う。脳の神経活動を例にとれば、ある神経に興奮が発生すると、その神経とつながっているさまざまな神経にも興奮が起こる。これが因果関係である。興奮というのは電気現象だから、ある電気現象が起こると、その電気が伝導して、別の部分にも電気現象が惹き起こされるわけである。つまり、神経系に起こったある原因がある結果を導くので、原因として特定できる現象も結果として計測できる現象もどちらも同じ電気現象として観察できる。原因と結果が同じ性質の物理化学現象でないと、同じ現象の変化として観察することは不可能になるから、因果関係があるとかないとかという話ができなくなるのである。

脳とこころは同時生起

この原理を使って脳の活動とこころの活動を考えてみると、脳の活動は物理化学現象つまり客観的現象だが、こころの活動は心理現象つまり主観的現象

脳の活動	物理化学現象	客観的現象
こころの活動	心理現象	主観的現象

脳の活動とこころの活動

り主観的現象なので、現象の性質が違っている。違う性質の現象（次元の違う現象）を結ぶとき、脳の活動を原因と考え、こころの活動を結果と考えるのは無理なのである。この難題は昔から指摘されていて、ある学者は神経過程（脳）と心理過程（こころ）の関係は「コンコミタンス：共存」であって、因果関係ではないと主張した。ここは共存というより「同時生起」関係というべきであろう。こころのさまざまな現象を因果関係で考えるためには、原因もこころの現象、結果もこころの現象でなければ、説明にならないことになる。

筆者の専門は神経内科という臨床医学の一分野だが、その中でもさらに狭い臨床神経心理学という分野である。どんな分野かという、さまざまな脳損傷で生じるさまざまな精神症状（神経心理症状という）を診断し、治療する（あまり治療はできないが）分野である。内科のように身体だけを扱うのでもなく、精神科のように心理症状だけを扱うのでもない。脳損傷と心理症状をつき合わせて考えることが専門である。

この経験が教えてくれたことは、脳損傷と神経心理症状の対応関係はとてつもなく複雑だという動かしがたい現実である。まったく同じ脳領域に局限した脳損傷を持つ患者が2人いたとしても、その2人の患者がまったく同じ神経心理症状を生じるとは限らないのである。損傷の中核になる症状は限りなく似ている場合ですら、症状全体が同じパターンになることなど決してない。

ある脳動脈に異物が流れてきて、この異物はその動脈を詰り、その結果、その血管が栄養を配給している脳領域に血液が流れなくなり、その結果、酸素やグルコースが欠乏して、その動脈支配領域の脳組織が死んでしまい、その結果、その領域の神経活動が消滅する、というところまで

は因果関係をたどれるのだが、その次の段階、すなわち、その脳領域の神経活動停止のために、これこれこれだけの神経心理症状が起きたという部分は因果関係では結べないのである。「そんなあほな」と思われるかもしれない。でも、血管閉塞→血流停止→血管灌流領域の脳組織破壊→その領域の神経活動停止はすべて同じ物理化学現象、同じ次元の現象で、観察しようとするれば観察可能な出来事だが、その領域の神経活動停止→一定の神経心理症状の発生は変化の次元が違う。現象の性質が違うのである。神経活動停止は細胞が死ぬ、という形態変化を起こすから見ればわかるが、神経心理症状の発生は心理現象だから、見てわかるわけではない。本人に自覚的变化を尋ねるなり、行動の変化を観察するなり、とにかく、こちらがなんらかの働きかけをしなければ、その変化を知ることにはできない。

もちろん2つの現象は同時発生だから、対応はある。神経細胞活動の停止に対応して、心理現象にも変化が生じるのだが、厳密に考えると、因果関係で理解するわけにはいかないのである。なんとも厄介な話で、ほとんど困ってしまうのだが、でも、現実はそのようなことである。この難しい関係が、一定の脳領域損傷が必ず一定の神経心理症状を引き起こすとは限らないことの大きな理由である。おそらく神経細胞の活動とこころの働きの間にはわれわれがまだよく理解できていない間隙が存在する。その間隙を推測だけで、あるいは言葉だけで、無理やり「エイヤッ」と結ぶのは、はなはだ危険なのである。

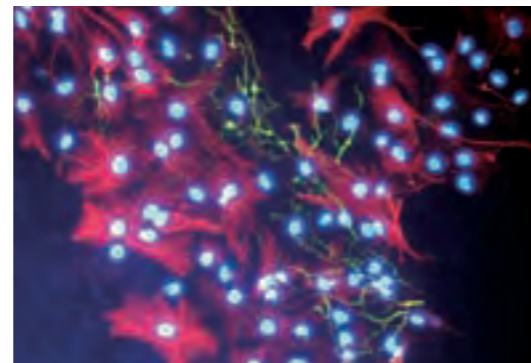
この危険を回避するためには、こころはこ

ころという心理現象特有の世界（次元）で完結しているものとして、その時間的關係を探つてゆかなければならない。脳の出来事とこころの出来事をいったん切り離して、こころの出来事はこころの出来事のつながりとして考えてゆかなければならない。

ここがなんとも面倒くさくて、悩ましいところである。脳とこころを因果関係で考えないように用心しつつ、しかもなおかつ、脳とこころは密接に対応しているものとして、2つの関係を探つてゆかなければならない。

こころは全体

脳には1千億の神経細胞があるとされ、これらの細胞たちがお互いに複雑につながりあって超複雑な構造を作っている。しかも、当たり前ながら、この1千億の神経細胞は全部生きているのである。つまりすべての細胞が、酸素やグルコースを取り込み、代謝物を吐き出し、しばしも休まず活動している。脳の中で活動していない細胞は存在しないのである。活動していない、というのは新陳代謝活動が停止している、ということだから、そのときその細胞は死んでいることになる。脳全体が全体として活動しているのである。



神経細胞の抗体染色写真
青は細胞核、緑は神経細胞、赤はアストロサイトという神経細胞の一種。(写真: <http://d.hatena.ne.jp/bioweb/20080119/1200775267>)



プラトン『ティマイオス』(カルキディウス訳・注解)
『ティマイオス』は、ギリシャの天文学者カルキディウス(4~5世紀)によって注解を付してラテン語に翻訳され、12世紀以降ヨーロッパで読まれるようになった。(パチカン図書館蔵)

全体として働く脳が作り出すこころは、脳よりもさらに確実に全体的な現象である。プラトンはその著書『ティマイオス』で、ティマイオスに世界生成の歴史を語らせているが、その中で、魂(こころに限りなく近いもの)を完全な球体とみなしている。この完全な球体である魂の一部が人間に分け与えられたと考えている。したがって人間の魂も完全な球体であり、だから頭という球体の中にこの魂が捉えられているのだという。

このような考えは現代科学に照らせば、まったくの荒唐無稽、絵空事にすぎないが、こころを宇宙全体に瀰漫する球体と捕らえるところは、筆者を魅了して止まない。自分の主観に立って自分のこころを経験するにすぎないが、こころは確かに全体と感ぜられる。その全体性を表現するには球体というのは見事な比喩である。こころは筆者のこころのように自分のまわりの経験だけで完結することもあれば、プラトンのこころのように全宇宙を含んで完結することもある。こころを満たす内容が少なければ少ないなりに、多ければ多いなりに、こころは完結して、球体である。

満ち足りている。

脳損傷で障害を生じた場合を考えてみても、あるいは認知症などで脳機能が低下した場合を考えてみても、意識されるこころ、自覚されている主観的なこころは、そのまま完結した世界を形作っている。そのまま全体として立ち現われる。すなわち、重度の健忘症の人がその物忘れ振りを自覚することはなく、重度の認知症の人がその知能低下を自覚することもない。物を忘れやすい心理状態のまま、あるいは判断力の落ちたままで、心は全体性を保っている。自分のこころという球体のどこかに穴や傷がある、というふうな自覚は起こらないのである。

生命現象のこの全体性はヒト以外の動物仲間をみても明らかである。1匹のサルはサルとして完全な個体を持ち、1匹のカメはカメとして完全な個体を持っている。形態の特徴や複雑さに差はあるとしても、個性という全体においてはそれぞれ完結し、完全である。完結し、完全な神経系を備えたサルのこころは、やはり1匹のサルのこころとして完結している。決して人間にくらべてどこか足りぬ、などと考えているわけ

ではないであろう。カメも同じで、カメの神経系はそれ自体完全であり、それに対応するカメのこころもやはり完結して、完全な状態にあるであろう。カメがウサギと競争しなければならない事態になったとしても、決して俺はあいつに比べて少し足が遅いな、などと自分の足の能力に不満を持つてはいないであろう。ヒトもサルもカメもいま生きているその状態で完全な個体と完全なこころを持っているのである。

つまり、こころはもともと全体であって、部分部分が組み上がって出来上がったものではない。神経心理学では、人間のこころを分解して(つまり症状に合わせて、ということだが)、言語機能、計算機能、知覚性認知機能、視空間機能、行為機能、記憶機能などと部分的な機能に分け、これらの総体をこころと考えるが、これはあくまで症状記載の手段であって、実際のこころがこのように個別の機能の足し合わせになっているわけではない。本当はこころという全体があるだけなのだが、それでは話が進まないから(プラトンに帰ってしまうから)、全体の切り出しやすいところだけを取り出して、整理しているだけなのである。

こうしたこころの部分的な働きを割り出すこと(異なる症状の記述)も、決しておろそかにできないのだが、同時にその部分的な働きが全体の中でどういう役割を演じているのか、ということを考えることもおろそか重要である。全体との関係において部分を捕らえることができなければ、こころの本性は見えてこないだろうからである。

心像という経験

少し話の筋道を変える。

筆者はいま「こころ」というテーマを頭に浮かべ、なんとかいま考え



かに星雲
ところの中の心像の動きを星雲にたとえる言語学者もいる。写真はかに星雲で、1054年に出現した超新星の残骸である。(©NASA, ESA)

ていることを読者にわかってもらうようなカタチにしようと、その考えを言葉にしているところである。

では、いま筆者が頭に思い浮かべている「ところ」とはいったい何なのだろう？ 言葉だろうか？ それとも観念（言葉では言い表せない意識の対象）だろうか？ それとももっと別の何か、たとえば意味のようなものだろうか？

「ところ」と、単語で思い浮かべていると、何か「ところ」という実体がありそうに思えるが、実はこれは心理現象だから、物理的な意味での実体はない。ところが作り出してくれる音声の記憶であり、視覚的な文字の記憶である。これらは記憶心像であって、実体ではない。

心像というのは、自分が自分のところの動きを経験することを可能にしてくれる形式である。カタチである。モノではない。ところは、さまざまなカタチ、つまりある心理的なカタマリをある輪郭を持つものとして経験する。自分のところに出現するさまざまな経験をカタチとして自

覚するのである。

この心像経験というものが、心理現象を理解する鍵なのだが、実はこれが難物である。自分のところを覗いてみると（覗く」という言葉には視覚的な意味しかないのでもずいぶん、適当な言葉がない。比喩的な意味と考えてほしい）、ところの中には（中」というのもずいぶん。別にここは入れ物ではないので、外と内があるわけではない。これも比喩的な表現）心像がウジャウジャと空間的にも時間的にも連続して動いていることがわかる。いつも動いていることがわかる。いつも動いていることを時間的連続性にポイント置いて流れにたとえ、ある言語学者はこの動きを空間的連続性にポイント置いて星雲にたとえている。またある哲学者はこのウジャウジャを時間と空間を含めて「純粹持続」と表現している。

文字「ところ」や音声「ところ」はそれぞれ視覚性文字心像、聴覚性言語心像として

経験される。ひらたく言えば文字は見て、音声は聞いて経験される。でもその意味はどうだろうか？ 意味は一応は言葉の羅列にすることが可能で、それだけを覚えることも可能である。たとえば、「ところ」を辞書で引くと「人間の理性・知識・感情・意志などの働きのもとになるもの」などと書いてある。でも、これはあくまで言葉であって、それ以上ではない。これだけだとやはり視覚性文字心像であり、そこから喚起される聴覚性言語心像にとどまる。

筆者が「ところ」をテーマにして考えているいま、思考の対象になっているのは、このような言語性心像群（文字や音声として記憶してきたことのいちいち）だけではなく、これまで「ところ」について考えてきた経験の全体である。言い換えると、「ところ」に関連するウジャウジャ心像のカタマリである。言葉（ひとつひとつが単語として区切られたもの）のカタマリではなく、それも含んだ関連する経験のカタマリである。このような経験心像は実は文字心像や音声心像のように区切りを持っていない。お互いの心像は相互に浸透しあっていて、カタチはあるにはあるが（カタマリとしてなんとなく経験できる、意識できる）、視覚や聴覚経験からの比喩で語れるような、はっきりした境界があるわけではない。モヤッとしたものとして自覚できるだけである。



ところは心像が浸透しあったカタマリ

違う言い方をすると、ところに起こる現象は全体としてつながっていて、個別に切れた現象ではない。1つ、2つと数えられるようなものではないのである。数字の比喩を使うなら、常に1つである。生命が連続した現象で、どこも切れていないのとまったく同じである。

心像と呼ぶと、切れているように考えられるかもしれないが、それは対象化され、明確に意識化されたときのこと、ところの奥を流れているとき、心像のすべては相互浸透状態である。視覚心像や聴覚心像など、知覚性心像の形式をとるときに限って、輪郭のあるカタチとして経験されるのである。

感情という経験

感情という経験は、心像経験に比べると明らかなように、カタチにならない瀰漫性の経験である。感じるだけであって、何を感じているかははっきりしない。昔から感情の代名詞みたいに使われる言葉に喜怒哀楽というのがあって、喜びや怒りや悲しみや楽しみというのは、「ヨロコビ」、「イカリ」、「カナシミ」、「タノシミ」などという言葉がつけられているため、この言葉の区切りに惑わされて、別々の感情に区切られているように思ってしまうが、実はお互いに連続して切れない。

この切れ目のない経験（感情）の微妙な變を言葉で表現しようとする、なかなか大変である。詩1つ、場合によっては短編1つが必要なことさえある。感情についての日本語本来の語彙はそれほど豊富ではないが、中国人が作り上げてきた語彙を見ると、心をくっつけた漢字が大量にある。たとえば、悔・悠・悟・悦・悩・悪・悲・悴・悶・悼・情・惑・惚・惜・愀・惠・惰・想・惻・愁・愉・愕・愛・感・惚・愧・愼・慄・慈・

慊・慙・慢・慣・慨・懲・慾・憂・憎・憐・憊・憚・慄・憤・慙・憫・憬・慙・懇・懦・愾・懶・懼など……。これだけ感情にはニュアンスがあるのである。こうしたところの微妙な動き・感情こそは主観的経験の基本であり、核である。

ところで感情はこのような、われわれが常識的に感情として理解している経験、つまりところのヒダやユレの感じだけではない。このような感情を仮に「情動性の感情」とすると、これとは別の性質を持つ感情がある。通常、感覚と呼ばれている主観的経験である。感覚は感覚で、感情とは違っていると、感覚を感情のカテゴリーに入れることには反対される向きもあると思うが、昔の学者の中には感情に入れている学者もいないわけではない。筆者はこの立場である。

感覚は、五感というこれまたよく使われる言葉があるように、われわれが見る、聞く、味わう、匂う、触るなどという働きによって、外界に存在する何者かを知覚する手段である。

視覚を例にとると、われわれは眼という感覚器を通して外界情報を得ることを「見る」と呼ぶ。「見る」という言葉は当然「何かを見る」という意味を含んでいる。しかし、実は「何か」を「見る」ことだけが視覚ではない。何かを見ず、ただ漫然と目を開けている状態を想像してみたい。このときわれわれはどんな経験をしているだろうか。なんとなく「見えている」という感じを持っているはずである。この「何も見ず、しかし「なんとなく見えている」という経験、この経験は感情にほかならない。

この点は聴覚のほうがわかりやすいかもしれない。目は閉じられるが、耳は閉じることができないから、われわれは起きているかぎり、なにかが「聞こえている」という感じを持っている。この「聞こえている」とい

<p>情動性感情 ところのヒダやユレの感じ</p>
<p>感覚性感情 「カラスの鳴き声」(知覚経験) + カラスの音が「聞こえている」(感情経験)</p>
<p>背景感情 主体的経験そのものを保障してくれる感情</p>

3種の感情

う感じ、これは感情である。

われわれはカラスの声を聞くと、「あ、カラスが鳴いているな」とカラスの声を知覚するが、この場合われわれの経験は「カラスの鳴き声」という知覚経験（カラスの鳴き声の心像生成：聴覚的なカタチの経験）に、カラスの音が「聞こえている」という感情経験（非心像性経験：カタチを結ばない経験）が合わさったものである。われわれはカラスの音が「見えている」という経験も、カラスの音が「匂ってくる」という経験もしない。ただ「聞こえている」と感じるのである。

このように五感を介してわれわれが外界の出来事を知るときに持つ、見えている（視覚性経験）、あるいは聞こえている（聴覚性経験）という独特の感情は、上述「情動性感情」とは性質が違うので、区別して「感覚性感情」と呼ぶことにする。

感覚性感情を考えると、避けて通れない概念がある。クオリアである。ある外国の哲学辞典は、クオリアを「直接に感じられる、あるいは直接に知覚される『質（クオリティ）』で、心理的状态あるいは心理的出来事の現象学的特徴」と定義している。とても面倒な表現だが、要するに五感を通してわれわれが感じる独特の経験という意味である。クオリアは筆者のいう感覚性感情に限りなく近い。ただクオリアは歴史

的にみると、知覚対象に備わっている知覚対象独特の性質を定義づけようとして出てきた概念なので、主観的経験でありながら、対象の特性に結んで語られることのほうが多い傾向がある。

たとえば色を見るとき。このときわれわれが主観的に経験する赤の感覚の程度や質は個人によってさまざまで、他人には伝えられない部分を持っている。このことを赤の「赤性（赤さ加減）」などと表現したりする。知覚対象に結んでクオリアが説明されるのである。

筆者の考える感覚性感情はこうした説明で理解されているクオリアよりもっと広くて、もっとあいまいな経験である。今見えているこのカタチ（視覚性心像）はおれの眼から入ってきたものだよ（視覚性感情）、今聞こえているこのカタチ（聴覚性心像）はおれの耳から入ってきたものだよ（聴覚性感情）という、心像生成の発生元についての神経活動の履歴の経験である。このような感情は、怒りとか喜びなどという、こころの揺れの感じではない。知覚活動に伴う独特の感じである。クオリアと呼んでもいいのだが、これまでクオリアを取り上げてきた学者たちは、どうもクオリアを知覚経験の「要素」みたいな捉え方をする傾向があるので、使い勝手がよくない。筆者が捉えようとしているものは、要素ではなく、むしろ連続である。たとえば視覚性感情は、視覚経験に限局する感情ではあるが、特定の視覚対象の性質にかかわる経験ではない。すべての視覚経験を通底する瀰漫性の経験である。

話がやや煩雑になるが、ついでに言うと、実は感情にはもう1つある。われわれの主観的経験そのものを保障してくれる感情で、「背景感情」とでも呼ぶしかない経験である。たとえば、起きて意識が活動し

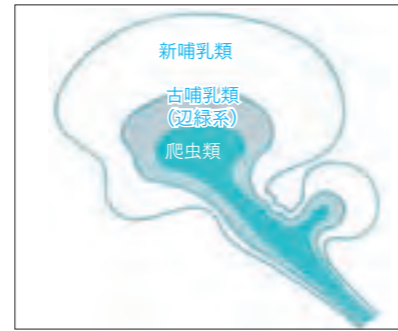
はじめたとき、まず感じるのは、「ああ、目が覚めた」というこころの動きである。疲れて眠くなったときには、「ああ、眠い」という感情が動く。あるいは起きて目が覚めたとき、今の自分が昨日の自分とつながっている感じがある。このような感情は情動性の感情とも知覚性の感情とも微妙に違う。別の神経メカニズムがその発生に関与している可能性がある。そのあたりはまだよくわからないが、自分の経験の、過去未来にわたる同一性を保障してくれる感情である。

感情はこころに瀰漫して、こころの全体感を作り出してくれる経験だから、これら3種の感情も当然お互いに入り混じっている。こうした複雑な感情を土台に知覚性心像が出現する。

感情から心像へ

ある一定の神経ネットワークの働きが複雑な電気現象を作り出す。このとき、同時に一定の心理現象が生成する。電気現象は電気現象で、次のさらに複雑な神経ネットワークの働きを作り出し、このネットワークがさらに複雑な電気現象を作り出す。するとまたこの電気的な働きに対応して、さらに複雑な心理現象が生成する。心理現象の変化に関しては、心理現象の中で因果関係を探らなければならない、というのはこの意味である。電気現象は電気現象で複雑化し、心理経験は心理経験で複雑化するのであろう。

長い長い動物の進化の時間経過の中で、いつのころからか、こころが発生したのである。まず瀰漫性の感情が誕生し、ついで、少しずつ少しずつ複雑な心的経験が誕生するようになってきたのであろう。つまり心像という、われわれが自分のこころに経験するカタチは、カタチを持



古い脳を抱え込みながら進化する脳
人間の脳はいちばん外側の新哺乳類脳よりもっと大きくなっている。マクリーン『進化する三位一体脳』(1990年)より。

たない瀰漫性の感情、中でも感覚性感情の複雑化につれて出現した心的形式ではないかと考えられる。

この長い時間をかけて生じた心理現象の複雑化、すなわち感情から心像への進化の過程は、われわれのこころの中で、意識下状態のこころから、意識化状態へ変換されるとき、一瞬間に繰り返されると考えられる。このあたりになると、まったくの仮説になるが、われわれのこころの歴史は、その始まりから現在までがすべて、1つの「純粹持続」に圧縮されている。この圧縮が感情である。この圧縮が、今現在の主体の必要に応じて、意識化されて気づきの対象となる。意識化という働き、対象化という働きが、圧縮をほどいて、個別の心像群を、つまり気づきやすいカタチを生成するのである。意識化の働きが、この連続をカタチに切り出す（分節する）のである。意識から外れると、このカタチはまた元の純粹持続へ帰ってゆく。

こころの中では、こうして心像のカタマリがほぐれたり、また集まったりしているのである。心像も、その母体である感情も、絶え間なく動いているのである。

参考文献

山鳥重『知・情・意の神経心理学』青灯社、2008年

論考

身体技法と社会学的認識

倉島 哲 Akira Kurashima
(関西学院大学社会学部専任講師)



見えるものとできること

新しく何かができるようになると、それまでのものの見方ががらりと変わってしまうことがある。英語が読めるようになると、それまではデザインとしか思っていなかった看板やTシャツのアルファベットが意味を持ち始める。車を運転できるようになると、自分がそれまでどれほど危険な自転車の乗り方をしていたかに驚く。子どもの目線からものを見ることができるようになると、幼児向けだと思っていた絵本やテレビアニメが意外と面白いことに気づく。このように、ものの見方は、見る人に何ができるかに依存している。

誰でも、この単純な事実を経験的に知っている。そして、自分の見方だけが絶対的ではないことは、少なくとも建前としては、わかまえている。誰もが、自分が見えるものに依拠して物事を判断して行動するほかないが、自分と他人ではできることも、見えるものもきつと違うはずだということを常に思い起こしながら、なんとかして自分と他人の接点を探り合っているのではないだろうか。

およそ人間関係というものが、異なるものの見方どうしの探り合いであるなら、社会とは、こうした探り合いの総体であることになる。このような社会——価値観やルールを共有する人々の集合——とは異なっている。ここで提案したいのは、共通の価値観に依拠しているつもりでも重点の置き方が異なり、共通のルールに従っているつもりでも適用の仕方が異なり、共通の利害関心を追求しているつもりでも実際の振る舞いは

異なる人々が、にもかかわらず持ちうる関係として社会を構想し直すことなのである。

異質性の社会と太極拳

伝統的な社会観が均質性をキーワードとするなら、新たな社会観のキーワードは異質性である。Tシャツの文字に赤面したり笑ったりする外国人や、車道いっぱい広がって自転車に乗る若者。最新のパソコンを人差し指だけでタイピングするお年寄りや、テレビアニメの同じ話ばかり毎日繰り返して見たがる子ども。これらの他者を、社会から排除もせず、同化して包摂もしないための方法が模索されているいま、異質性を中心にすえた社会観を提出することは意味のあることだろう。

そのためには、見えるものとのできることの相対性を具体的に捉えるためのフィールドが必要である。人は、自分とはできることが異なる人の存在をどのように知るのだろうか。そして、できることの異なる人が、見えるものも異なる他者であることは、どのように推論されるのだろうか。さらに、見えるものの異なる他者どうしは、どのように共存できるのだろうか。これらの問いは、抽象的な一般論によってではなく、フィールドの具体的な事実によって答えられねばならない。

私は、このような問題関心に導かれ、太極拳教室のフィールドワークを行ってきた。京都にある教室で4年、イギリスのマンチェスターにある教室で2年にわたり、毎週数回の練習に参加しつつ、先生や生徒にインタビューを行ってきたのである。それによって、太極拳ができるようになることが、見えるものをどのように変化させるかを経験的に記述することができた。また、見えるものの異なる人々どうしが取り結ぶこと